

日本計量生物学会 ニュース・レター No. 6

1982年12月

目 次

- I B Cの日本開催に思う (山本純恭)
XI I B C見聞記(前) (正法寺孝雄)
統計解析における数式処理言語の利用(鎌倉稔成)
検定の見直し—臨床試験を例として—(椿 広計)
XII I B C第1回、第2回運営委員会議事録
第1回総務小委員会報告

“生をあきらめ死をあきらむるは佛家一大事の因縁なり。生死の中に……”というくだりは、曹洞禅をわが国に伝えた名僧道元の著書“正法眼蔵”の修証義の冒頭を飾っている文章であります。ここでは“あきらめ”は“明らめ”と書かれていたと思います。われわれ人間がこの世に生きているという事実、さらに、やがて死を迎えるという冷厳な事実を明らかにすることは、学問を志すわれわれ(佛家)の生涯の仕事であるという意味でしょうか。

20年以上も前のことですが、歯科大学で統計学を教えていた頃、新入の学生諸君にこの修証義の話を持ち出し、医学生物学が人の生死にを明らかにするに最も近い位置にあると思われている今日、

I B Cの日本開催に思う

日本学術会議会員
山本純恭

生涯の仕事として出発する幸せをかみしめて出発してほしいと述べたことを想い出します。いうまでもなく、どの学問分野がこの“明らめ”に近く、どれが遠いということを述べたものではありません。

近年、計量生物学の研究に対する学界の関心が増大し、広汎な専門分野の異なる方々が結集してこの坊主生涯の仕事に参加しようという気運にあることは、まことによろこばしいことです。計量生物学の研究の振興を図り、再来年わが国で開催されることが本決まりとなったI B Cを成功させることは、われわれ当面の目標でありましょう。

さらに一步進めて、この分野の研究・教育の振興を図るための体制の整備と充実へ向う道をお互に模索したいものだと思います。

(東京理科大学)

第Ⅺ回 I B C 見聞記 (前編)

今年の正月にO氏からフランスのトゥールーズで今年9月6日から10日まで開催される第11回国際計量生物学会(通称BIOMETRIE 82)に参加しませんかとの誘いの賀状が舞い込みました。地名だけはP.フェルマーとの関係があることは知っていましたが、フランスのどの辺にあるのかは知りませんでした。しかも、小生はフランス語のABCさえも満足には知らないが行って見たくなり、フランス語会話のカセットを購入しました。だが、先天性外国語不適應症のためフランス語は少しも身に付かないまま出発となり最新流行の電訳機を購入しました。このオモチャも未だ十分には使えず実際にはフランスで一度も使用しませんでした。

フランスへの旅路にスポンサーが付かなかったから、オーバー・ブッキングを学習的にはしない航空会社の最も運賃の安い航空券を求めました。奇妙なことに、まずシンガポールまで行って後にパリに行くといった省エネ時代を逆行する贅沢な経路を取る羽目になりました。帰路もチューリッヒからやはりシンガポールを経由でした。大阪・シンガポール間はジャンボ機でしたが、客席は満席でありしかも8割以上の乗客は日本人旅行者でした。しかし、シンガポール・パリ間では日本人を探そうと思うと大変のようでした。ここでは約半分の乗客がオーストラリアの田舎からの50～60名の団体で、約40日間かけて世界一周の旅路に立った第1日目の連中に、小生は取り囲まれる羽目になりました。彼等はまずロンドン参りをし、英国に10日間位滞在した後にヨーロッパ見物をしてアフリカ、カナダ、米国、香港等を経由して帰国する予定でした。日本になぜ立寄らないのかと尋ねると、自分達にはあまり興味はなく、しかも中国のどこにあるのか知らない等の返事が観光団の大きなバッチから返って来ました。非常に短期間ではありましたが、彼等には相互扶助の精神が行き渡っている様でした。その潜在的な仲間意識のためか、アブダビ国際空港で彼等のお世話になり、飛行機に置いてきぼりにされることなく助かりました。

南フランスにあるフランス第4の都会のトゥールーズは、パリから航空機で約1時間南の地点

にあり、国内線ですから機内放送はすべてフランス語だったと思います。乗っていれば目的地に着くものと安心していました。すると乗務員が機内サービスのつもりで配る雑誌類は大部分フランス語なので何もいらないというと、写真を見ているだけでも暇つぶしになるからといって写真の多い本を貸して呉れました。しかし、トゥールーズの案内書を勉強していると、その絵本を見る暇もなく飛行機はガッタンと目的地に無事到着しました。

空港から学会会場までは、非常に不愉快な思いをしながら言葉の全然通じないスペイン系らしい雲助運転手のタクシーに乗る羽目になりました。これから先2週間思いやられるなあといいながら重い荷物を持って学会の受付に少々しょぼくしながらたどり着きました。この時、丁度COMPSTAT 82の開会式が始まった様でした。このCOMPSTAT 82はBIOMETRIE 82に先立って8月30日から9月3日まで同一会場で開催されました。両学会は人口約40万人のトゥールーズ市の中心から南東にナルボンヌ道路沿にあるPaul Sabatier 大学構内の事務局の建物が主会場となって開催されました。この大学は噂によると13世紀前半にトゥールーズ市街地に設立され、理工医系の学部が1960年代に現在の位置に移転・新設されたそうです。理学関係キャンパスと道路を隔てて薬学、歯学、医学関係の建物が広大な校内にありました。さほど大きな樹木はなかった様です。また、すぐ近くには応用科学の国立研究所群の建物があり、その向う側にはエア・フランスの滑走路があり飛行実験や航空機の修理に使われていると聞きました。これらキャンパスを取り囲む様に新興住宅が立ち、宅地の造成も進んでいる様でした。

やっとたどり着いた学会会場の受付の人達は男性も女性も慣れない手つきでしたが、何でもやってやると言った感じで出来る限り親切に面倒を見ようと努力していました。小生はBIOMETRIE 82にも参加する予定でしたし、外国の大学の宿舎はほとんど知りませんでしたから経験のためにといい前半を学生寮に泊ることにしました。その宿舎は、6階建て位だが人が乗るエレベータはなく、各部屋は縦に長い独身用の8畳余りの室でベットと幅1メートル位の整理戸棚と水道が付いていました。便所とシャワーは各階で共同使用すること

になっていましたが、暖房設備、洗濯機等はなかったようです。外観内装共にお世辞にも立派なものとは言えませんが、庭が広いこと、会場に近いことおよび宿泊料金が格安であった（1泊朝食付で約2,000円）は良かったと思います。BIOMETRIE82では町中のホテルに移ろうと思っていましたが、旅の荷物を一度解き財産も少し増えて来ると移るのが面倒になりBIOMETRIE82もその室に居座りました。

両学会とも受付の主要スタッフはほとんど同一の人達でした。彼等は両学会とも初めの2、3日間は当番で国際列車の最終便で到着する参加者を温かく迎えるために午前0時頃まで受付を開き、参加者の便宜を計るよう努力していました。校内には生協のようなものもなくスタッフは飲物等を大きな箱で持ち込むと頑張っていました。受付のスタッフは直接の大学関係者だけではなく、英語の喋れる家族まで動員された形で手伝っていた様です。また、英語の喋れない秘書や事務員は裏方として隣りの情報科学関係の建物内にある学会事務局で仕事をし、BIOMETRIE82の終り頃には相当疲れていた様でした。ここでも、手真似と英語でお願いすると、言葉はほとんど通じないのに非常に良く面倒を見て呉れました。僕が接触したトゥールーズの人達は陽気で人が非常に良い様でした。

外国人でも母国人は雰囲気等で割りと識別可能であると言っている人もいましたが、今度トゥールーズで日本人は遠目にも容易に認識できたのには驚きました。

COMPSTAT82では、口頭発表として招待講演15件（米国4件、ヨーロッパ11件）、通常講演56件（日本から1件）および約140件の短時間発表（日本から7件）がありました。この他に、37件のポスター発表と多数のソフトウェアの展示・実演がありました。展示実演の主要なものはBIOMETRIE82でもありました。商業用ソフトウェアと非商品のソフトウェアとを混在させて展示していました。出席者を見るとCOMPSTATはヨーロッパの統計計算に対する学会であり、米国とはあまり関係がない様な感じがしました。出席者は全体で約600名でした。米国からは約30名参加していた様でした。日本からは13～14名の参加者がいた様でした。その中で

目立って多いグループは九大関係者の人達でした。特に、学生時代から外国での国際会議に参加するという事は非常に喜ばしいことです。

両学会ともにパーティーや見学旅行はほとんど同じ企画でした。まず、第一日目の夕方には大学長招待の立食パーティーがあり、水曜日の午後にはカルカッソンの古城、アルビー見物、トゥールーズ市内見物およびアルマニアック酒蔵見学の4コースにバス1台ずつ借り切ったの有料の半日旅行がありました。人気の良いコースは2日目の朝すでに定員オーバーとなっていました。同伴者のための1日旅行も1回ずつ行なわれ人気は良い様でした。しかし、両学会の間の週末には地中海の名勝地までの1泊旅行が予定されていましたが、参加者不足のため中止となりました。学会主催の夕食会は両学会ともに有料で木曜日の夕方にありました。バス数台を借り切った片道約1時間位離れた趣きの異なる所へ行き、帰りは午前0時頃でした。

地中海への1泊旅行中止のため週末は行くあてがなくなりました。土曜日は良かったのですが、日曜日のトゥールーズ市は昼食時よりも悪くほとんど店が閉まっていた。仕方なくレンタカーを借りては見ましたがこれがまた大変でした。町中の道路は放射状になっているし、道路標識はフランス人向けに出来ているのに加えて小生は全然フランス語が出来ないと来ていて、さらに北方向への主要道路は夏休みの帰りの車で一杯でした。よって、あまり遠くへも行けず早目に車を返して損をした気持と清々した気持の複雑な気分でした。市街地が少し分り始めた頃、良いギフトショップを受付で尋ねると、良い所があるから教えてやると言うのだが地図を見せても印をつけて呉れません。明日連れて行ってやると言うのでしぶしぶ同意しました。次の日、案内嬢が2人で御両人とも学会の世話人の奥様でした。1人は店は知っていて英語は聞けるが英語は喋れないため、彼女の友人が通訳して呉れました。また、その通訳嬢には広島弁の英語が分かりにくいらしく、友人からフランス語で通訳してもらっているという変な組み合わせの3人でした。店の名前などは表に目立つ様には書いてなかったようですが、路地に入って薄暗い階段を3階まで上がると立派なドアがあり、何か合図をすると中から立派な紳士がドアを開けて呉れました。中はまばゆいばかりに照明があり、足元に

は絨毯が敷きつめられており驚きました。さらに、驚いたことには時計、貴金属類の陳列にはカギを掛けておらず、自由に手に取って見ることが出来ました。しかも、市価の3割引位で売っており、価格も会員価格が別に表示されていました。この店では現金だけでの売買でしたので、フランス・フランの旅行小切手さえも使うことが出来ませんでした。

さて、本題の第11回国際計量生物学会の報告を行います。開会式は9月6日(月)に大学本事務局の建物の1階の400名位は入れそうな部屋で午前10時頃から盛大に挙行されました。来賓の方は好きな言語で歓迎の挨拶を(予算の関係上?)全く通訳をつけずに行い、予定の半分の30分位で式典は終わりました。招待講演は時間帯が重ならない様に工夫されていましたが、一般講演と招待講演は原則として並行して行なわれ、一般講演は4つの会場で同時進行していました。招待講演会場以外は拡声機はなく聞きづらい場合もありました。一般講演は原則として関連性のあるらしい招待セッションにつけられたために、プログラムは会場によって長短様々でした。招待論文の部には、次の15個のセッションがありました。

1. 生物データに対する数理模型の構築とそのあてはめ(D.L. Solomon),
2. 臨床試験における疫学的問題(G. Enderlein),
3. 統計学的生態学(G. Gerard),
4. 実験の計画(P. W.M. John)
5. 生体薬理学的応用(H. Flühler)
6. 臨床試験の設計・計画・実施および解析(J. Ware)
7. 専門職並びに専門分野としての生物統計学の将来(S. Greenhouse)
8. 農業試験のための線型模型の形成(A. Kudo)
9. 多次元分割表並びにカテゴリカル・データ(J. Lellouch)
10. 動植物育種における統計学(W. Hill)
11. 生物学並びに医学における確率過程(P. Macdonald)
12. 数組のデータから得られた結果の結合(G. H. Freemann)
13. 第3世界での計量生物学の必要性

(P. Dagnelie)

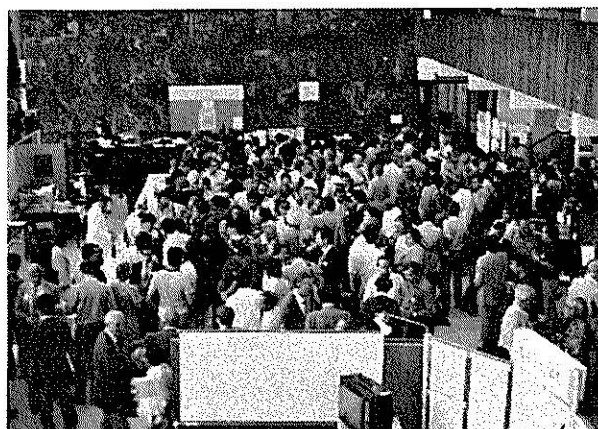
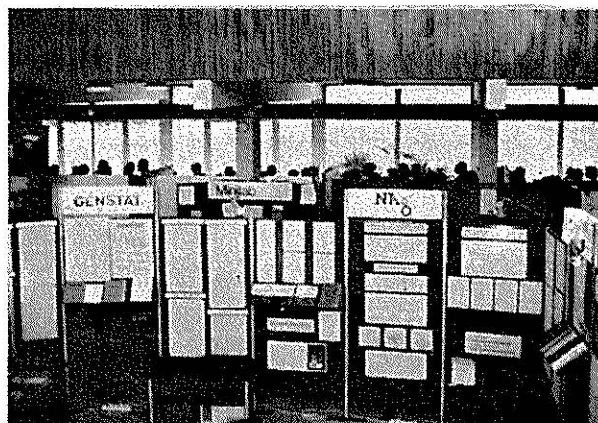
14. 遺伝学に於ける計量生物学的問題点

(R.W. Curnow)

15. 生物統計学での統計計算・データ解析の必要性(A. Bartkowiak)

これに加えて、当初一般講演は210件以上、ポスター発表約30が予定されていたプログラムの最終版が2冊の予稿集とともに配られました。学会2日目にはもう一度プログラム最終版が配布されました。それには一般講演数件とポスター発表3件が追加されていました。始めの最終版には一般講演の会場での座長名は全然入っていませんでしたが、2回目の最終版では半分位は座長名が入っていました。その後も一般講演のスケジュールが非常に多く変わり、飛び込み講演もあったようです。また、最終的には10数件の講演が取り消しになりました。これらのことは、学会本部と現地委員会との間で密接な連絡が取られていなかったためでしょう。ともかく、平穩無事に成功裡に学会は終了しました。

(正法寺孝雄・広島大)



第XI回IBC2景：展示会場及びレセプション

統計解析における 数式処理言語の利用

標本分布の近似を行なったりその性質を知るために、高次のモーメント、キュミュラントの計算の必要に迫られることが度々ある。その計算の煩雑さに比べて、計算ルーチンの簡単さにこんなものは計算機でなんとかなるのではと思う人も多かろうと思う。とは言うものの体力との勝負で、何頁にもわたる計算を延々とするのである。

たとえば、生存時間データの解析で用いられるモデルに、Cox(1972, 1975)の比例ハザードという有名なモデルがあるが、この部分(Partial Likelihood)の近似のを考えてみよう。タイが多い場合(特に離散ル)には部分尤度の正確な計算は、組み合わせ尤度計算に莫大な時間がかかり、いかに大算機と言えども計算上の工夫なしでは実用上不能と言ってよい。この尤度の近似法として Jewell and Prentice(1980, *metrika*)によって原点でのテラー展開考えられた。この展開では、各次の係数が実限母集団から非復元抽出によって得られた標和の分布のキュミュラントになっているところおもしろい。特に共変量が0, 1の2値しか取れる場合には、2次以降の各係数は超幾何分布のキュミュラントと一致する。超幾何分布のモーメントの間にはKendall and Stuartに

$$\mu_{r+1} = \{ (1+E)^r - E^r \} \left[\mu_2 - \{ Np+n \cdot (q-p) \} \mu_1 + \{ npq(N-n) \} \mu_0 \right]$$

の関係があるのでこれを利用して高次のモーメントは求められる。ただし、 μ_r はr次の平均値まわりのモーメント、Eはモーメントの次数を1つ上げる作用素である。さらに、モーメントとキュミュラントとの関係を利用すれば高次まで展開できるというわけである。

しかしながら、5次、6次のキュミュラントを手計算するとなれば相当の努力が必要であって、得られた結果も保証しかねるということになりかねない。

こうした計算に適した数式処理の計算機言語に

LISPがあり、最近種々の入門書が出版されている。LISPそのものはカッコが多すぎて使い易い言語ではないかもしれないが、この言語上にのっているREDUCEという数式処理プログラムは比較的簡単である。分数計算、因数分解、式の展開、微分、テラー展開、行列計算などたいいていの計算は可能である。ただし、積分は簡単でないし、ヴァリエーションが多いせいかREDUCEのサポートするところではない。

先程の部分尤度の原点でのテラー展開の話にもどるが、数式処理のプログラムによって5次の係数を求めると、

$$\begin{aligned} & - \{ n^5 - 4(6r-1)n^4 + (108r^2 \\ & + 24r-5)n^3 - 168(r+1)r^2n^2 \\ & + 12(7r+24)r^3n - 144r^4 \} \\ & \cdot (n-2r)^2(n-r)^2r^2 \\ & / n^5(n-4)(n-3)(n-2)(n-1)^2 \end{aligned}$$

が得られる。この程度であれば、手計算も可能であろうが、計算機で済むところは計算機に任せ、より高度な方法論、アルゴリズムの開発に着手した方がよい。

計算機の利用は実際にデータを扱う応用統計関係の人が多かったが、今後は、理論の展開にも計算機は重要な役割を演ずるようになってくるだろう。特に、数式処理言語の統計理論の発展に及ぼす影響は大きいように思うのだけれどもさてどうだろうか。

(鎌倉稔成・統数研)

検定の見直し —臨床試験を例として—

中国、韓国の抗議に端を発した教科書問題は検定制度の見直しという事態に発展し、今夏の新聞誌上を大いに賑わした。教科書検定が問題となるより少し前、もう一つの検定、すなわち「統計的仮説検定」に対して強い疑念が表明された。6月19日、C.R.Rao教授は東大での講演の際、雑談風の議論のなかではあったが、仮説検定というものはいずれなくすべきものである、という主旨の発言をなされた。残念ながら、雑談は雑談に終わり、Rao教授の真意は確認できなかったが、

統計を学ぶ者にとって、「仮説検定」の論理、とりわけ、「帰無仮説」とか「第1種の過誤」の意味は最も分かりにくいものであることは否定できない。

現在、汎用されている仮説検定は、初めに有意水準（神聖な5%）が与えられている。そのため、データ数を十分大きくとれば、仮説からのどんな小さな乖離をも検出できるから、必ず仮説を棄却できることになる。（但し、ここでいう帰無仮説は、母数空間で測度0の型のものに限る）この事情は、AIC等を用いたモデル選択の議論でも同様である。データ数を増せば、より高次のモデルが選択される。検定やモデル選択の最終目的が標本を用いた推定や予測に限られているならば、不確実性を伴うパラメータ推定を行なう損失を減らすために帰無仮説を設定することは意味があろう。（赤池の「ケチの原理」）

しかし、仮説検定は現状では、推定のためのみに用いられている訳ではない。例えば、臨床比較試験では、標準薬と治療薬の改善率 p_1 と p_2 に有意差が有るか否かという判断を行なうために、「両側検定（有意水準5%）」がなされている。この場合、帰無仮説 $p_1 = p_2$ には全く意味がない。というのは帰無仮説が偽であることは殆んど常に真だからである。これに関連して、竹内啓教授は6月8日の京大でのシンポジウムで、この問題を母数空間を $w_1 = \{p_1 - p_2 < 0\}$ 、 $w_2 = \{p_1 - p_2 = 0\}$ 、 $w_3 = \{p_1 - p_2 > 0\}$ の3つに分割したうえで可能な7種の陳述（ $w_1, w_2, w_3 \dots w_1 \cup w_2 \cup w_3$ ）のなかから誤り確率を母数に依らず α 以下とする多重決定問題ととらえるべきであると提言され、これによって両側ではなくて、片側5%検定が代りに用いられるべきであることを指摘された。（この場合、従来の有意差なしは、 $w_1 \cup w_2 \cup w_3$ という結論に代る。）

筆者は、この問題を多重決定の問題として捉えるのには大賛成である。唯、 w_2 という陳述は、統計的推測（推定、予測）のために多重決定を行なうとき以外は次のようにすべきである。すなわち、母数空間は、 $w_1 = \{p_1 - p_2 \leq d_1\}$ 、 $w_2 = \{d_1 < p_1 - p_2 < d_2\}$ 、 $w_3 = \{p_1 - p_2 \geq d_2\}$ と分割するのがより望ましい（但し、 $d_1 < 0 < d_2$ ）。この場合、 d_1, d_2 は臨床的有意差と呼び、統計学ではなくて固有技術の観点から定められる

ものである。実際の手続きは、 $p_1 - p_2$ の片側、又は両側 $1 - \alpha$ 信頼区間と w_1, w_2, w_3 との共通領域の有無によって陳述を変えろという方式が、 w_2 のみを陳述することの過誤が安全側にずれるが簡明である。 w_2 のみを陳述する過誤のみを 2α まで許せば、片側信頼区間（又は、両側 $1 - 2\alpha$ 信頼区間）を用いてより容易に判定ができよう。いずれにせよ臨床的有意差が設定可能ならば、データ数をふやした場合にも有意差なしという結論が生じうるのである。

さて、データ数が小さいときには、どうしても $w_1 \cup w_2 \cup w_3$ という陳述がなされることが多くなる。これでは折角の実験から何も知見が得られないことになる。その場合、 α を増加させ、最初に $w_1 \cup w_2 \cup w_3$ という陳述から脱したときの陳述とその際の α を参考情報として記すことが判断のうえで有用であろう。（検定の有意確率と対応）

以上、仮説検定を実際的判断のために用いることへの疑問を紹介した。今後、こちらの検定制度も見直しが始まることを切望するものである。

（樺 広計・東大）

The XIIIth International Biometric Conference (IBC), 1984

第1回運営委員会議事録

(1) 日時 1982年7月30日（金）

18:00~20:00

(2) 場所 統計数理研究所会議室

(3) 出席者

林知己夫、浅井晃、井山審也、太田邦昌、大橋靖雄、岡崎陽一、奥野忠一、開原成允、工藤昭夫、駒澤勉、佐久間昭、塩見正衛、渋谷政昭、正法寺孝雄、新谷茂、鈴木茂、竹内啓、樺広計、中上節夫、中浜博、長谷川政美、鳩山由紀夫、菱沼從尹、福富和夫、古川俊之、山田行雄、山本俊一、山本純恭／栗原恵美子

(4) 議事

議案Ⅰ 第Ⅻ回IBC開催日時と場所を次のように決定する。

1984年9月2日(日)～8日(土)

於：京王プラザホテル(新宿)

これを9月のToulouseでのⅪIBCで提案する。

議案Ⅱ 所要経費概算

収入

参加会費 26,600千円

期限迄 3万×350=1,050万
期限後 3.5万×400=1,400万
同伴者 0.7万×300=210万

バンケット 4,000(0.8万×500=400万)

個人負担金

指定寄付金 26,600

計 57,200 (外国人350名
日本人400名を予定)

支出

Ⅰ 会議準備費 (19,040千円)

1. 人件費 1,920 事務局員給与、謝金
2. 旅費 2,226 組織委、運営委、各小委員会出席旅費
3. 庁費 10,769 消耗品費、サーキュラー印刷費、プロシーディングス印刷製本、同郵送料、委員会開催費

4. 事務委託費 4,125

Ⅱ 会議費 (36,210千円)

1. 人件費 4,410 登録受付要員、アルバイト等賃金、日・英同時通訳謝金
2. 旅費 16,645 外国人招待講演者40名旅費(平均40万円)
3. 庁費 15,155 事務室、控室借上費、会場付帯設備使用料、

主催者レセプション、バンケット費用

Ⅲ 募金経費 (1,950千円) 事務委託費(学振)、募金趣意書

計 57,200

註 以上の予算には国費負担分は含まれていない。国費負担の主要な部分は、学会発表の行なわれる会議場の借上費で、京王プラザホテルの見積りでは4,800千円となっている。

議案Ⅲ 各小委員会委員を次のメンバーで構成する。

(運営委員会の委員長、副委員長、事務局長、委員計48名の名簿は5月7日の第4回準備委員会決定どおり—ニュース・レターⅢ3及び4掲載済)

総務—奥野忠一、浅井晃、佐久間昭、嶋津靖彦、椿広計、長谷川政美、廣崎昭太、山本俊一

募金—菱沼從尹、小泉明(幹事)、阿部裕、飯淵康雄、奥野忠一、開原成允、佐久間昭、林知己夫、古川俊之

経理—井山審也、太田邦昌、鈴木茂

プログラム—竹内啓、大竹正徳、大橋靖雄、岡崎陽一、丘本正、開原成允、飯谷太一、工藤昭夫、小泉明、後藤昌司、塩見正衛、渋谷政昭、鈴木茂、中上節夫、嶋山由紀夫、福富和夫、柳川堯、山本俊一、吉沢正

IBCプログラム担当—竹内啓、開成成允、福富和夫、山本俊一

広報担当—吉沢正、嶋山由紀夫

プレティン担当—渋谷政昭、大橋靖雄

なお当分の間次のメンバーで事務局会議を設け、諸事務を統括する。

事務局員—(林知己夫)、奥野忠一、井山審也、太田邦昌、椿広計、長谷川政美、山本俊一

(顧問会または後援会の結成を準備中である)

議案Ⅳ 関連学会会長への依頼文を早急に出すこと。

議案Ⅴ 第Ⅺ回IBCへの対策

- 1) Japan deskの設置
 - 2) プログラム委員会
 - 3) 財務委員会
 - 4) 長期計画委員会
- 等の検討を行なう。

第2回運営委員会議事録

(1) 日 時 1982年10月8日(金)
18:00~20:00

(2) 場 所 統計数理研究所会議室

(3) 出席者 林知己夫、浅井晃、井山審也、太田邦昌、大橋靖雄、奥野忠一、後藤昌司、駒沢勉、塩見正衛、渋谷政昭、嶋津靖彦、正法寺孝雄、新谷茂、鈴木茂、椿広計、中上節夫、長谷川政美、鳩山由紀夫、広崎昭太、福富和夫、山本俊一、山本純恭、栗原恵美子

(4) 議事

1. 第XI回IBC報告

a. 林会長の報告：フランスのToulouseで本年9月6日~11日に開催された同コンファレンスには約600名の参加者があり、それぞれ100名以上はいる5会場で並行してセッションが行なわれた。開会式の演壇には主催者側を代表して、Paul Sabatier大学の学長D. Bancel、農業科学研究所(INRA)の所長F. Spitzと同所のBadia(Organizing Committeeのsecretary)、中部ピレネー地域の代表President du Conseil Régional Midi-PyreneesのA. Raymond氏らが並び、いずれもフランス語でしゃべっただけで、英語の通訳はなかった。Biometric Societyからは会長のH. A. Davidだけが演壇にすわり、英語で謝辞とこの会議の意義を述べた。Carcassonneへのexcursionや郊外でのDinner partyはよくarrangeされていたが、receptionは狭い室に満員で食物も飲物もすぐになくなった。Badia氏とinvited paper Program chairmanであったカナダのDunnett氏との間に情報交換がわるく、さいごまでうまく行かなかったと思われる。日

本はこれらのことを参考にして上手に取計ってほしいと言われた。またcontributed sessionは自由にやれるのでそれ(invited sessionはある特定の立場からきめられたことで一般につまらぬから)を充実すべきである。コンピュータプログラムの情報が十分得られるようにすること、ポスターsessionを充実させるべきだとの意見もフランス側から私に寄せられた。また、日本へは奥さん連れて観光も兼ねて来るのだから社交プログラムも充実したい。日程は84年9月2日~8日という第1案がEuropean Meeting of Statisticiansと重なるとか、8月にはASAやCOMPSTATと重なるとかいろいろな意見が出たが、Council meetingで最終的に日本案にきまった。

b. 奥野事務局長の報告：日本人の参加者は、運営委員会メンバーからは林知己夫、浅井晃、太田邦昌、大橋靖雄、奥野忠一、工藤昭夫、塩見正衛、正法寺孝雄の8氏であったが、そのほかに、増山元三郎、丹後俊郎、永田久紀、八坂敏夫、緒方昭、山本和子、山岸正昭(チバガイキー)、佐藤喬俊(サンド薬品)の8氏が参加され、計16名であった。夫人同伴はそのうち4名で計20名であった。招待講演は塩見氏だけであったが、寄稿論文の発表は10編あった。

長期計画委員会では、次々期(13回)を1986年にハワイまたはワシントンで開催すること、invited paper、contributed paperの扱いをいつまでに"Biometrics"に掲載しなければならないか、host regionの役割などについて議論し決定した。英語とフランス語(今回追加)およびhost regionの言葉がそのconferenceでのofficial languageであることを確認した。Japan Planning Meetingでは、invited paperはprogram chairman(12回はNorth CarolinaのSolomon氏)に送られるとともに、印刷のためにlocal organizing committeeにも送ることとした。invited paperのspeakersの旅費はhost countryの負担になるが、日本はどの位用意できるかとの質問に対しては、15

sessionsのそれぞれに対してUS \$ 3,200 (約80万円)までは確実に準備したい、それ以上は今後の募金活動の成否によると答えた(前以て林会長と打合せの上)。

Council meetingでは、林会長の報告どおり、日程が確定し、同時通訳は必要なら日・英間だけでよいことが認められた。林会長から歓迎のあいさつがあった。

Japan programming committeeで、Invited papers programming committeeのchairmanはSolomon(指名済)であるが、日本からは工藤昭夫、竹内啓、山本俊一の3氏がメンバーにはいることが確認された。

2. 今後の活動方針

- a. 10月中に総務小委員会を開いてタイム・スケジュールを確定し、Solomonに連絡する。
- b. 他学協会の協賛を依頼する文書を早急につくる。
- c. 募金活動について経団連の割当てがどうなったのかを確認する(林会長から催促したがまだ返事がない)。
- d. ニュース・レター№6を10月中に発行できるように原稿を集める。
- e. 早急に「プログラム小委員会」を開いて頂き、invited paper sessionへの日本側の提言をまとめるとともに、contributed papersのアブストラクトの長さガイドラインをきめて頂く。(竹内委員長が10月29日まで外遊中なのでそのあとになる)

第1回総務小委員会報告

(1) 日時 1982年10月25日(月)

15:00~18:00

(2) 場所 東大工学部6号館 計測会議室

(3) 出席者 井山審也、太田邦昌、奥野忠一、
鈴木茂、椿広計、鳩山由紀夫/
栗原恵美子、末益牧子

(4) 議事

1. タイム・スケジュールの決定:(下記)
2. 他学協会長へのあいさつ一次回までに奥野が原案をつくる
3. preliminary announcementの原案—末益さんに依頼
4. 総務小委員会のメンバーの確認—これまで事務局員だけで活動していたが、いよいよ総務小委員会が活動開始しなければならない時機にきたので、メンバーの見直しをし、上記出席者のほかに次の方々に入っていただき計14名とすることにした。

浅井晃、小泉明、佐久間昭、竹内啓、

長谷川政美、広崎昭太、山本俊一 嶋津靖彦

なお奥野研究室の栗原恵美子さんには学会側の事務連絡を、JTB「国際会議事務局」(ICSと略称)の主事末益牧子さん(または営業第一課長石井誠一氏)にはいずれ事務の委託をするという予定で手伝って頂くことにした。

《タイム・スケジュール》

83年1月初め—preliminary Announcement 発送

5月—1st circular 発送(call for papers, invited paper sessionのtopicが3月中にSolomonから来ればそれを記入する)

10月—2nd circular(registration formを添付して送る, invited paper sessionsのorganizersの名前も入れる)

84年1月末—contributed papersのabstract 〆切、registration fee 3万円はこの時点まで、あとは3.5万円にする

3月—invited paper sessionsのspeakers 決定(Solomon)

4~5月—プログラム最終決定

6月末—preliminary program(時間、場所とも)をregistorした人とregions' groupsへ送付

9月—第XII回IBC開催